

## お雇いフランス人教師 P. J. ムリエの面影

加藤 詔士（法学部・教授）

### 1. ムリエの面影

ムリエとって、幕末の元治元（1864）年8月3日にフランスから来日したお雇い教師がいる。モンペリエ大学医学部という名門校の出身であり、しかも日本語をととてもよく解した、あの P. J. ムリエ（Pierre Joseph Mourier、1827-?）である。

ユネスコ東アジア文化研究センターが編集した、お雇い外国人の基本台帳ともいべき『お雇い外国人名鑑』によれば、ムリエは明治4（1871）年8月1日から明治13（1880）年4月9日に至るまで、名古屋藩の洋学校、文部省の東京外国語学校、さらには司法省の明法寮に連続して雇い入れられ、仏語学教師、法律顧問、法律学教師、通弁反訳を職務としていた<sup>(1)</sup>。ただし、ムリエの活躍はこれだけにとどまらなかった。お雇い教師として雇い入れられる以前を含めて、実に多方面にわたる多彩な活動をし各地にいくつかの足跡を残している。なかでも、横浜における気象観測、日本養蚕技術の研究と翻訳紹介、日本書籍ならびに日本地図の収集とフランスへの送付、日本人向けのフランス語学習書『仏語入門』（明治7）の著作などといった、多彩な日仏交流推進活動はとくに注目される<sup>(2)</sup>。

そんなムリエはどのような面影をしていたのか。筆者は一枚の写真を検討し、その写真の人物こそムリエその人であるという確信をうるに至った。本稿では、同写真の伝来ならび

に写真の台紙裏面の書き入れをめぐって検討し、写真の主がムリエであることを考察する。

### 2. 『宇都宮三郎旧蔵アルバム』

P. J. ムリエと思われる写真は、管見の限り、一点知られている。慶応義塾福澤研究センターが所蔵する『宇都宮三郎旧蔵アルバム』のなかにある一枚である<sup>(3)</sup>。ほかには伝存を聞かない。同『宇都宮三郎旧蔵アルバム』は福澤宗家から伝わった遺品類の一つであって、「おそらく、宇都宮三郎の没後、福澤一太郎の家に身を寄せていた三郎の妻・貞（1853-1926）を經由して福澤家に残されたもの」と考えられている<sup>(4)</sup>。ちなみに、貞は陸軍薬剤監大澤昌督（生年不詳-1900）の長女。妹の絲（葦都）は福澤諭吉の長男一太郎（1863-1938）に嫁した。

『宇都宮三郎旧蔵アルバム』は縦157ミリ、横245ミリ、厚67ミリの写真帖である。押型紋様入の革製で、小口には金属の止め金が付いている。各ページの表面と裏面に二枚ずつ写真を入れるポケットがあり、ここに肖像写真が配されている。集合写真も含まれるが、大部分が個人の肖像写真であって、個人写真が72枚、集合写真11枚（その内訳は2名の集合写真6枚、3名の集合写真3枚、4名の集合写真2枚）から成る。外国人と思われる写真も15枚含まれている。いずれも名刺判写真である<sup>(5)</sup>。

「明治時代は名刺判写真（カット）を名刺代わりに使用することが流行った時代だった。裏面に自分の名前をサインして交換した」。それで「明治のひとかどの人物は、相当数の名刺写真を所蔵していた」のであった<sup>(6)</sup>。宇都宮三郎もまた、交流のあった東西の人物の名刺判写真を蔵していたものである。

肖像写真のなかには、高峰讓吉（1854－1922）、志田林三郎（1856－1892）、桂川甫策（1832－1890）、徳川昭武（1853－1910）と判断される写真があるほかに、K. W. ハラタマ（Koenroad Wolter Gratama, 1831－1888）、H. ダイアー（Henry Dyer, 1848－1918）、A. F. ボードウィン（Anthonius Franciscus Bauduin, 1820－1885）、C. J. エルメリンス（Charles Jacob Ermerins, 1842－1880）といったお雇い外国人の写真もあり<sup>(7)</sup>、宇都宮三郎の交際交流の状が知られる。実際、宇都宮三郎の口述自伝『宇都宮氏経歴談』には160名ほどの人物が登場し、彼らとの幅広い交流をめぐる記述が含まれる<sup>(8)</sup>。ちなみに、ハラタマとは長崎精得館ならびに大阪舎密局のお雇いオランダ人教師、ダイアーは工部大学校のお雇いスコットランド人教師、ボードウィンは長崎精得館、大阪医学校、大学東校のお雇いオランダ人教師、エルメリンスは大阪医学校のお雇いオランダ人教師である。

このうち、桂川甫策は桂川家7代目・桂川甫周（1826－1881）の弟。宇都宮三郎とは開成所における同僚である。また桂川甫周と宇都宮三郎の両者による『化学新論問答』（明治8）という共著がある。

ちなみに、宇都宮三郎は幕末・明治期に活躍した化学技術者である。名古屋市教育委員会が出生地（名古屋市中区新栄三丁目15）に設置した史跡標札には、下記のように紹介され顕彰されている（ルビは省略、以下同じ）。

「宇都宮三郎出生地

天保五年（一八三四）尾張藩士神谷義重の三男としてこの地で生まれた。藩校明倫堂に学び、後に、上田帯刀の門に入り、西洋砲術と火薬の研究に没頭し、嘉永年中（一八四八～一八五四）着発弾を造ることに成功した。安政四年（一八五七）西洋砲術研究のため脱藩した後、幕府洋書調所製煉方を経て、幕府陸軍所で軍制改革に参画した。

明治維新後、開成学校教官などを経て、明治十五年（一八八二）工部大技長になった。セメントや耐火レンガの製造、醸造法の改良など、わが国化学工業界の先駆者として偉大な貢献をした。

名古屋市教育委員会」

### 3. ムリエの肖像写真

#### (1)

『宇都宮三郎旧蔵アルバム』にあるムリエと推定される写真は、縦89ミリ、横52ミリ（台紙は107ミリ×61ミリ）の名刺判肖像写真である（資料①参照）。既述のように、幕末から明治にかけて、上流階層の間では社交上の訪問や面会のさい、名刺代わりに自身の名刺判肖像写真を交換することがおこなわれていた。ただし、写真は高価であっただけに「手当たり

しだい配ったわけではなく、これぞという人にしか渡さなかった」であろうと考えられる<sup>(9)</sup>。

この名刺判肖像写真の主がムリエと考えられるのは、その写真の台紙裏面の記述内容による（資料②参照）。台紙の裏書きには下記の記載がみられ、「宇都宮義綱氏に贈呈。1867年3月6日横浜にて。ムリエ博士」と読める。この裏書には実に貴重な情報が含まれている。贈呈先、贈呈日、贈呈場所、博士学位を有する贈呈者という4点にかかわる情報である。

「à Monsieur  
Outseuno Miya  
Yoshitseuna  
Yokohama 6 Mar. 1867  
Mourier  
Dr.」

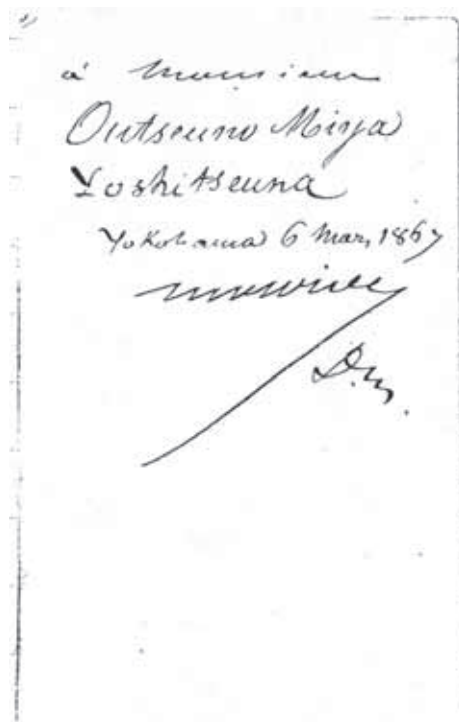
資料① ムリエの肖像写真



まず第一に、贈呈先は「宇都宮義綱氏（Monsieur Outseuno Miya Yoshitseuna）」とある。かれこそ尾張藩士神谷半衛門義重の三男・義綱こと三郎（1834-1902）である。通称鉦之進。安政4（1857）年12月尾張藩を脱藩したのち「宇都宮三郎」の名に変更したものである<sup>(10)</sup>。

第二に、「1867年3月6日」という贈呈日が注目される。このころ、ムリエは、後述のように、横浜居留地171番に居を構え医師を開業していた。そのムリエと宇都宮三郎の接点は、宇都宮三郎が第二次長州征討に従軍後ムリエのところに診療に訪れたことに始まる。この従軍のさいに腰を病んだ宇都宮三郎を、ムリエが診察したことがきっかけで知己を得て交流を重ねるなか、この肖像写真を贈ったであろうと推定される。

資料② ムリエの肖像写真の裏書き



宇都宮三郎は尾張藩を脱藩したあと江戸に出、幕府の洋書調所（開成所）、化学所、講武所などに雇われ、あるいは出入りし、大砲、火薬、銃などの製造を指導していた<sup>(11)</sup>。そのなか、慶応元（1865）年5月、第二次長州征討のさい幕府軍に従軍した。砲術ならびに兵制の識見を生かして、紀州藩の兵制改革あるいは尾張藩の装備の洋式化などを手がけた<sup>(12)</sup>。フランス式を参考にした近代的装備への改良である。しかし、従軍の途中、広島で腰を病み「脊椎の一番終の骨が痛み始め」歩行困難となった。ようやくのことで京都に帰り、江戸に戻った。「腰抜け」状態に陥り、日本人医師の治療を受けたがなかなか治らない。西洋医の治療をしきりに希望し、「日本に来て居る西洋の医師に一度診察して貰いたい」と願った。そのさい、まず在京中の蘭方医・松本良順（1832-1907）が診察し、そのあと松本は父・佐藤泰然（1804-1872）に「外国の医師に診察させて貰いたい」と申し送った。その佐藤の紹介で開業医ムリエに診察を受けたものである。慶応2（1866）年のころのことであって、当時、佐藤泰然は横浜弁天町に住まっていた<sup>(13)</sup>。

宇都宮三郎は、後年このときの事の顛末を下記のように回想している。佐藤泰然が「仏蘭西人モリーと云ふ医師が宜い」といって連れていってくれた、というのである。

「それから早速駕籠で横浜に往って佐藤氏に遇って仏蘭西人モリーと云ふ医師が宜いと云ふことでモリーの処に佐藤が自分を連れて往った此時始めて西洋流の診察を受けた先づ親戚の事、父母の健康、

生死、兄弟姉妹の有無等の調べから始めて殆ど半日余費して診察し是れは生きる死にませぬと言った又薬を服んだから癒ると云ふ訳でない松の樹の沢山ある処に静かにして居るが宜しい……」<sup>(14)</sup>

宇都宮三郎はその後も「時々横浜に往って診察を請けた」<sup>(15)</sup>。

この「腰抜け」状態になったさい、「三郎は病床において死を覚悟して、医学の進歩のために自分の遺体が解剖されることを希望し、大学東校（現在の東京大学医学部）宛に『解剖願』を提出している。実際に三郎の解剖は行われなかったが、この書簡は、日本における解剖志願の第1号となった」<sup>(16)</sup>。明治元年11月のことである。

その『解剖願』においても、ムリエ（文中ではモリー氏）の診察を受けたことについて、下記のように記されている。同『解剖願』によれば、宇都宮三郎は「仏国医師モリー氏之療治を受け」ただけでなく、「和蘭ガラタマ氏等にも追々診察処方方を請」うていた。「和蘭ガラタマ氏」とはお雇いオランダ人化学教師 K. W. ハラタマ（Koenroaf Wolter Gratama, 1831-1888）と考えられる。ハラタマと宇都宮三郎は開成所の同僚であった。

「私儀、若年之頃一向学問を好不申、只々剣術柔術のみ執心して修行罷在候内、西洋砲術漸く相行はれ候に付、転学仕始て劍は一人之敵、砲は万人之敵なるを知り、数年刻苦修行致大小砲並器械弾薬製造運用之術一通り習熟仕候処、追々西洋諸学術深奥之義理見聞致候に髓に窮理分析之

二学に通候而は砲術大成に難立至と存附、何卒右二学科修行仕度と相心懸就中分析学試験に力を尽し研究罷在候へ共、微力と申、且年来不学故何分修行抄取不申、徒に時日を費し候内、乍未熟旧幕府之撰挙を以、元開成所化学教授方出役被申付、尚又引続修業罷在候処、野州辺之擾乱中国筋之事件等にて軍伍に随ひ、所々奔走仕候際雨湿風寒に被侵身痛水腫一時に相発し殆危篤に至り候に付、横浜表へ立帰仏国医師モリー氏之療治を受け一旦生命相延候へ共、其後病症種々転変仕、尚又モリー氏並和蘭ガラタマ氏等にも追々診察処方方を請候へ共、中々快復之候少も無之病体次第に差重く空く死を待候のみ之事にて……

元開成所教授方出役

明治元辰十一月 宇都宮鑛之進<sup>(17)</sup>

ムリエが宇都宮三郎を診療した縁で二人は親密になり、これ以後、東京・築地の桂川甫周邸においてしばしば交遊することになる。その桂川家文書にも、下記のように、モルリーことムリエが宇都宮三郎の「病氣不容易大病に付跡の養生極大事なり」と語ったことが記されている。秋水とは宇都宮三郎の雅号である。

「林正十郎横浜より一寸中帰り秋水兄に遇ひ候閑暇無之伝言如左

此頃屢モルリーに遇申候、モルリー曰宇氏の病氣不容易大病に付跡の養生極大事なり。……」<sup>(18)</sup>

## (2)

名刺判肖像写真の裏書で注目される第三点は、「横浜」という贈呈場所である。当時の住所人名録のうち、たとえば、『1867年チャイナ・ディレクター』の「在留外国人 (Foreign Residents)」の項には

「Mourier, 一、medl. practitioner, Yokohama」

とあり<sup>(19)</sup>、また『1869年中国・日本・フィリッピン・クロニクル・アンド・ディレクター』になると、同じ「在留外国人」の項に

「Mourier, Dr., medical practitioner, 171, Yokohama」

と記録されている<sup>(20)</sup>。1867（慶応3）においても1869（明治2）年になっても、ムリエは横浜の居留地に在住していたのである。

ちなみに、ムリエの来日は元治元（1864）年8月3日である。この日、P & O社の蒸気船カディス（Cadiz）号、800トンで、妻および娘2名を同行して横浜に来着した<sup>(21)</sup>。横浜居留地内に居を構え、やがて医者を開業していたのである。

## (3)

第四は「博士」学位についてである。ムリエはフランスのモンペリエ大学医学部に学び、医学博士号を取得している。モンペリエ大学の学籍関係文書のなかには、ムリエが同大学に入学し単位を取得し、しかも医学博士号を取得したことにかかわる一連の確かな記録が残されている<sup>(22)</sup>。

まず、最初の学籍記録として、

「学籍簿214番

ピエール・ジョセフ・ムリエ

1827年5月6日生

ドローム県トリニャンに誕生」

とあり、生年月日ならびに出生地はムリエの「出生証明書」<sup>(23)</sup>と同一であることから、ムリエその人の学籍簿に間違いないと判断される。

また、資格試験については、受験許可ならびに第六回までの試験に合格したことの記録(1844年8月29日および1846年9月10日、1846年9月30日、1849年8月16日、1850年7月12日、1850年7月30日、1850年8月12日付)が残されている。そのうち、第六回試験については下記のとおり記録されている。

「第6回試験に合格

1850年8月12日

デュマルクス

クレススチャン シネルク」

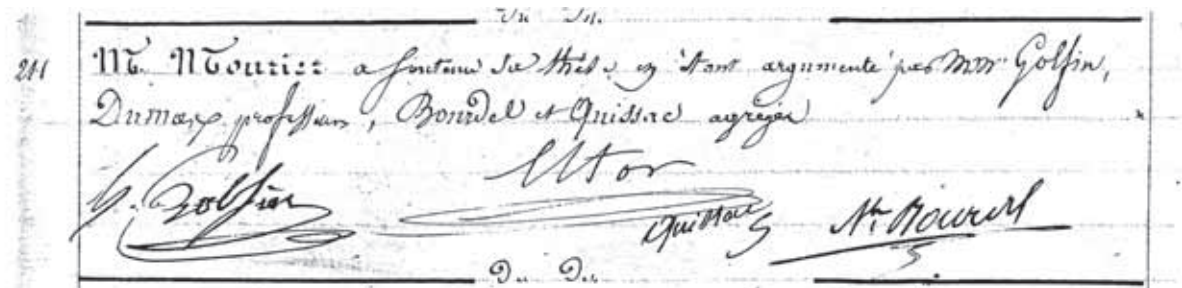
一方、1850年、『充血試論 (Essai Sur Les Fluxions: Thèse)』と題する博士論文<sup>(24)</sup>をまとめ学位を申請した。博士論文口述審査を受け、同年8月24日には博士号授与が認められている。口述審査については、

「ムリエ氏は、ゴルフン、デュマール両教授、および教授資格を有するブルデル、キサック両氏を審査員とする博士論文口述審査を受けた。

エストール

B. ゴルフアン キサック ブルデル」と記録(資料③参照)され、博士学位試験に合格したことについては、次のような記録がある(資料④参照)。

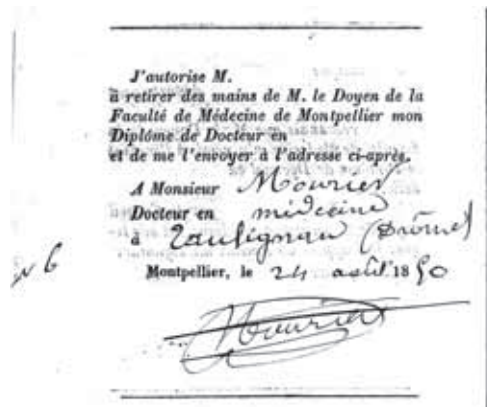
資料③ ムリエの学位取得記録—博士論文口述審査



資料④ ムリエの学位取得記録—合格証明



資料⑤ ムリエの学位取得記録—学位受領委任状



「  
医学博士の  
学位を取得するに相応しいことを証する。

1850年 8月24日

B. ゴルファン キサクク  
エストール ブルデル」

そのほか、下記のような学位受領委任状もあらかじめ用意されており、これもムリエが医学博士号を取得したことの証左となる（資料⑤参照）。

「私は、モンペリエ大学医学部長から、  
私の\_\_\_\_\_学位記を受領すること、および下記住所への送付を、\_\_\_\_\_氏に委任します。

氏 名 ムリエ  
学 位 医学博士  
出生地 トリニャン（ドローム県）  
期 日 1850年 8月24日  
ムリエ」<sup>(25)</sup>

お雇い教師のなかには履歴・学歴についてずいぶん怪しい者も含まれる<sup>(26)</sup>が、ムリエは出生地や出生日も判明し、伝統ある名門校モンペリエ大学医学部の卒業生、しかも医学博士号の取得という経歴確かな人物だったのである。

以上のような名刺版肖像写真の台紙裏面にみられる贈呈先、贈呈日、贈呈場所、博士学位の4点をめぐる考察から、『宇都宮三郎旧蔵アルバム』に含まれるこの一枚の写真の主はP. J. ムリエと断定できるであろう。

#### 4. 宇都宮三郎による名古屋藩お雇い教師への周旋

ムリエと思われる肖像写真が『宇都宮三郎

旧蔵アルバム』に収められていること、および同写真の裏面に「宇都宮義綱氏に贈呈。1867年 3月 6日 横浜にて。ムリエ博士」という書き入れが認められることは、ムリエと宇都宮義綱（三郎）の交遊を裏づける点で貴重である。しかも、ムリエが名古屋藩お雇い教師として雇い入れられることになる事情と背景に関連する史料として注目される。

もともとムリエは招聘されて来日した訳でなく、みずからフランス文部省に日本派遣を申請してやって来た。「日本の医学、農業、工業、とりわけ養蚕に関する研究計画」を提出すると、元治元（1864）年 6月10日付で派遣許可があり、同年 8月 3日に横浜に来着した<sup>(27)</sup>。確かな雇主がいるお雇い外国人ではなかったのだから居留地外居住は許されず、横浜居留地171番に居を構え開業医をしていた。この間、既述のように、同地における気象観測、日本養蚕技術の研究と翻訳紹介、日本書籍ならびに日本地図の収集とフランスへの送付など、種々の日仏交流推進活動をした。そのご、明治 4（1871）年になって名古屋藩に招かれることになるのだが、その雇入れは旧尾張藩士・宇都宮三郎の斡旋によるものであり、ムリエが宇都宮三郎の「腰抜け」の病を診療したことから知己の間柄になったことがきっかけであったと考えられるからである。

ムリエの名古屋藩雇い入れは宇都宮三郎の斡旋によるという重要な史実を証する史料は、少なくとも二種ある。第一は、ムリエ雇い入れの際に取りかわされた条約（雇用契約）書<sup>(28)</sup>であり、その第一条には下記のように

「宇都宮義綱君ノ周旋ニテ・・・名古屋学校教師ニ雇候事」と明記されている。宇都宮義綱とは、前述のとおり、宇都宮三郎の本名である。

「名古屋藩大参事志水忠平同大参事丹羽賢同権少参事水野忠雄君等名古屋藩政庁ニ代リ仏国モリー君ト取結条約左之如シ  
第一 条  
一同君ヲ宇都宮義綱君ノ周旋ニテ明治四年朔日ヨリ同六年七月晦日迄二ヶ年之間名古屋学校教師ニ雇候事

.....

明治四年四月朔日

仏国コンシユル

名古屋藩大参事 志水 忠平  
大参事 丹 羽 賢  
権少参事 水野 忠雄」

第二は、名古屋藩から外務省に出願された雇入伺書<sup>(29)</sup>である。上記の条約（雇用契約）が取り結ばれたあと、外務省にムリエの明細を報告し雇入を出願した文書であって、同省の検査を経たのち雇入免状が授与されることになる。この雇入伺書にも、宇津宮義綱の斡旋によることが次のように記録されている。

「 外務省へ問合 弁官

名古屋藩ヨリ別紙ノ通伺出候間御省ニオイト得ト御取調ノ上見込御申越可有之尤右条約書面中字津宮義綱御用ニ付明後十七日上坂致シ候由右以前ニ御聞届相成度情実申出候間不御即答有之度操ニモ御懸合申入候也 四年四月十五日

別紙伺書受

同省意見弁官宛

名古屋藩ヨリ別紙ノ通伺出候間当省ニオイト取調ノ上見込可申進旨尤右条約書面中字津宮義綱御用ニ付明後十七日上坂致シ候由右以前ニ御聞届相成度情実申出候間否即答可申進旨致承候右条約書一覽候処別ニ差支モ無之唯雇入ニ相成モリ一年齡書記無之ニ付下礼致シ就テハ御聞届ノ上如例同藩ヨリ条約横文並訳文添当省へ申出候様御沙汰相成度此段及即答候也 四年四月十五日

同省へ通達 弁官

仏国

モリー

同人儀名古屋藩へ二ヶ年ノ間學術教授ニ雇入度旨願ノ通御聞届相成候間為御心得此段申入候也 四年四月二十日 」

ムリエが名古屋藩に雇い入れられることになったのは、『宇都宮三郎旧蔵アルバム』の主・宇都宮義綱（三郎）の「周旋」によるものであったのである。

## 5. むすびームリエ肖像写真の歴史的意義ー

お雇いフランス人教師 P. J. ムリエと思われる肖像写真は『宇都宮三郎旧蔵アルバム』のなかにある。写真の主がムリエその人であると考えられるのは、写真の裏書きの内容からである。

その裏書きとは、「宇都宮義綱氏」という贈呈先、「1867年3月6日」という贈呈日、「横



浜」という在住地、そして「博士」という称号がとくに注目され、これらのいずれの点からみても、写真の主は P. J. ムリエにまちがいないと考えられる。

ムリエは元治元（1864）年 8 月 3 日に横浜に来着したが、慶応 3（1867）年に至ってもなおどこからも雇い入れの口がかからなかった。横浜居留地に在住して開業医をしていたが、そこに、元尾張藩士の宇都宮義綱こと三郎が「腰抜け」状態におちいり診療を求めてやって来た。一度ならず「時々」やって来て診療を受けた。

この宇都宮三郎を診療したことが、ムリエにとって大きな転機となった。その理由の第一は、同診療が機縁になって宇都宮三郎の知己を得、宇都宮の「周旋」で名古屋藩に雇い入れられることになったことである。ただし、医学教師ないし医師でなく「フランス語学教師」としてで雇い入れられた。第二に、名古屋藩のお雇い教師に任用されたことで、これ以後明治 13 年 4 月まで、文部省の東京外国語学校、さらには司法省の明法寮に連続して雇い入れられ、お雇い教師稼業が続くことになったからである。

本稿で検討した名刺判肖像写真は、お雇いフランス人教師 P. J. ムリエの面影を伝える貴重な資料であり、同写真の持ち主である宇都宮三郎とムリエとの親密な関係を裏づける史料価値を有している<sup>(30)</sup>。

## 〔注〕

- 1) ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』小学館、1975、437-438頁。
- 2) 拙稿「名古屋藩洋学校お雇いフランス人教師 P. J. ムリエ」、加藤詔士・吉川卓治共編『西洋世界と日本の近代化-教育文化交流史研究』大学教育出版、2010、42-65頁。拙稿「武理恵『仏語入門』（明治 7）-明治初期のフランス語学習書をめぐる考察-』『愛知大学教職課程研究年報』第 2 号、2013 年 2 月、11-31 頁。拙稿「お雇いフランス人教師 P. J. ムリエの日仏交流推進活動」、洋学史学会『洋学』第 21 号、2014 年 7 月、195-246 頁、ほか。
- 3) 本件は、豊田市郷土資料館編『舎密から化学技術へ-近代技術を拓いた男・宇都宮三郎-』（豊田市教育委員会、平成 13、7 頁、126 頁）より知ることができた。同写真の画像は、慶應義塾福澤研究センターから提供された。記して多謝する。
- 4) 犬塚孝明・石黒敬章『明治の若き群像 森有礼旧蔵アルバム』平凡社、2006、242-243 頁。
- 5) 慶應義塾福澤研究センター（西澤直子先生）のご教示による。記して多謝する。
- 6) 豊田市郷土資料館編『舎密から化学技術へ-近代技術を拓いた男・宇都宮三郎-』前出、97 頁。
- 7) 人物名の確定は、同上、106-107 頁による。
- 8) 交詢社編『宇都宮氏経歴談』汲古会、昭和 7、増補（初版は明治 35 年刊行）。
- 9) 犬塚孝明・石黒敬章『明治の若き群像 森有礼旧蔵アルバム』前出、212 頁。
- 10) 交詢社編『宇都宮氏経歴談』前出、1-3 頁、26-28 頁。
- 11) 同上、57-93 頁。
- 12) 同上、98-118 頁。
- 13) 同上、123-128 頁。村上一郎『蘭医佐藤泰然-その生涯とその一族門流-』大空社、1994、169 頁。横浜弁天町の在住については、村上一郎、同上、165 頁、173 頁、175 頁、178 頁、あるいは学校法人順天堂編『順天堂史上、学校法人順天堂、1980、141 頁。
- 14) 「仏人モリー氏の診察」、交詢社編『宇都宮氏経歴談』同上、128 頁。
- 15) 交詢社編『宇都宮氏経歴談』同上、129 頁。
- 16) 豊田市郷土資料館編『舎密から化学技術へ-近代技術

を拓いた男・宇都宮三郎-』前出、47頁。

- 17) 『明治元年ヨリ同十四年ニ至解剖紀事』、豊田市郷土資料館編『舎密から化学技術へー近代技術を拓いた男・宇都宮三郎-』前出、54頁より再引。渡辺淳一『白き旅立ち』（新潮社、1975、153頁。新潮文庫、1979、175頁）でも、

「江戸へ戻った鉦之進は、すぐ、佐藤泰然のところへ行き、彼の紹介で横浜にいる私人医師モリーの診察を受けた。」

という一節がある。鉦之進とは宇都宮三郎の通称。

- 18) 宇都宮三郎（秋水）から林正十郎への伝言。慶応3年5月末。今泉源吉『蘭学の家桂川の人々 最終篇』篠崎書林、1969、450頁より再引。
- 19) *The China Directory for 1867*, Hongkong, 1867, p.44.
- 20) *The Chronicle & Directory for China, Japan, & the Philippines, for the Year 1869*, Hongkong, 1869, p.104.
- 21) *The Japan Herald* (6 Aug. 1864) p.337, p.339.
- 22) 以下の学籍関係史料は Bibliothèque Interuniversitaire, Section Medecine, Montpellier 蔵。
- 23) P. J. ムリエの出生証明書は下記のとおり。'Extrait de L'acte de Naissance de Pierre Joseph Mourrier' (Centre de Documentation Universitaire, Direction des Services d'Archives, Département de la Drome, France 蔵)。

「1827年5月6日、ドローム県トリニャン村身分担当官たる本官アントワヌ・ジェルボーの前に、当村在住の年令36才、商人ピエール・ジョセフ・ムリエ氏が出頭のうえ、同申請者と妻ローズ・アルマーンドとの間に、本日午前9時誕生した男児を本官に提示し、ピエール・ジョセフと命名すると申請した。上記の申請および提示は、当村居住の成人農民パンパン・ルイならびにレイモン・マルシェ立会いのもと行われ、申請者ならびに本官（立会人は除く）が署名し、申請者らに対し、当証明書を読みあげたのち、確かにかれらが本官に申請をした旨知らせた。ジェラルム・ムリエ」

- 24) Mourier, P. J., , *Essai Sur Les Fluxions: Thèse*, Montpellier, I. Tournel, Snr, 1850. 48p.
- 25) 以上のモンペリエ大学医学博士号取得にかかわる記述は、拙稿「名古屋藩洋学校お雇いフランス人教師 P. J.

ムリエ」(前出、45-46頁)と重複するところがある。

- 26) 梅溪昇『お雇い外国人、明治日本の脇役たち』講談社学術文庫、2007、241-242頁参照。
- 27) ドベルグ美那子「ムリエ蔵書目録と初期フランス日本学」、有坂隆道編『日本洋学史の研究』X、創元社、1991、258-259頁。Minako, D., 'La Bibliothèque Japonaise Eclectique du Dr. P. J. Mourier et ses Approches Ethno-Historiques et Ethnographiques,' *L'Ethnographie*, LXXXVI, 2 (1990) pp.131-132.
- 28) 山田千疇『椋園時事録』巻40、明治4、48丁、52丁参照。『愛知県教育史』第三卷（愛知県教育委員会、昭和48、63頁）にも一部掲出されている。
- 29) 明治四年四月「名古屋藩仏国人モリーヲ雇用ス」『太政類典』第一編 自慶応三年至明治四年七月 第五十七卷 外国交際外人雇入（国立公文書館蔵）。
- 30) 本文中の資料①②の利用については西澤直子先生（慶應義塾福澤研究センター教授）より、資料③④⑤の利用については田所光男先生（名古屋大学国際言語文化研究科教授）より、ご指導をいただいた。記して多謝する。